

写真

中部中・2 小林 文馨

私は小学校を卒業してから、買い物や親の付き添いなどの理由以外で、休日に外に出たことがあまりない。数えてみても、十回あるかすら怪しい。

私はいわゆるインドア派で、小学生のころも公園などでスポーツをしたり、学校の休み時間に校庭で遊んだり、家の近くをのんびりと散歩したりすることも普通の小学生と比べると少ない方で、そのせいか運動が大の苦手になり、体育の授業がある日はそのことを考えるたびに気が重くなってしまうようになった。そんなふうになった原因はたくさんあった。外に出れば虫がうじゃうじゃいるし、夏は暑いし冬は凍えそうになるし、それを我慢して弟にバドミントンをしようと言ったら下手だから、という理由で拒絶されるし、休日なんかはゲームをしたり、スマホを触ったり、漫画や本を読んだりして時間を潰していた。

そんな私の数少ない趣味の一つが写真を撮ることだった。最初はお父さんのお古のスマホで家の敷地内からカメラ機能を使って写真を撮っていた。それも、実にぶれていて、なんでこんなものを撮ったのか自分でも分からないものばかりだった。例えば、夕日を雲が遮ってしまったっている空の写真に、全体が薄くなって消えかけている虹、庭の木、家具、庭の土、どうでもいい夕方のテレビのニュース。それらを自慢気に家族に見せていたと思うと、やっぱりひどい後悔の念に駆られてしまう。

そして、二年生になって、つい最近もらった自分専用のスマホで写真を撮るようになった。それでも、家から見た風景だけ撮るのには少し飽きてきた。

学校からの帰り道、私は田植えがすんだばかりの田んぼを見て、「撮ってみたい」と思った。田んぼの若い稲の緑と、その近くにそびえる飯盛山の緑が私の目に美しく映ったからだ。でも、いくら撮りたいからといって、平日は学校があるので、のんびり撮影する時間はそんなない。だから休日はどうだろう、という考えになった。長らく外に出ていないので、休日に行くのは気が引けた。自分から疲れに行くなんて嫌なのだ。学校は仕方ないけれど、休日はゆっくりしたいという私の習性が出てしまっていた。だけど、一年のうちでこんなにきれいなのは今だけだと思って、休日に自転車で行くことにした。もちろん、スマホ片手に。

当日、私は田んぼと山に近い駐車場のあたりまで自転車を漕ぎ、その後は車に気をつけて自転車を降り、そしてそれを押しながら撮影しようと思った。最初は見たものの全てをがむしやりに撮った。その日は真夏のような暑さで、雲は太陽を一秒たりとも遮ってくれず、フライパンの上にいるような心地だった。それでも、目の前の「撮りたい」には敵わなかった。やっぱり虫はいたけれど、暑さのせいとかチョウくらいしか見かけなかった。

次は、お目当ての山と田んぼの、絵に描いたように鮮やかな緑を撮った。陽がまぶしいおかげでどこでシャッターを切っても全部綺麗に映る。今まで何も気にせずに通り過ぎていたものたちとは思えないほどの映りだった。飯盛山と田んぼがちょうどカメラに収まる場所で何度も撮影した。その後はその周辺の物を撮った。周辺は田んぼばかりなので、絵になるものが多かった。車通りもほぼなかった。ので、車を気にすることなく自分のペースで撮れた。むしむしして暑かったけれど、そんなのもどうでもいいくらいに目の前の田んぼの緑や真上を飛ぶチョウ、太陽の光を受けてきらきら輝く用水路の水、雲のない真つ青な空、電線にとまった鳥、あぜ道に咲く花に興味しんしんだった。時間を止めてこの景色をそのままにしたいくらいだった。

と思う。

一時間くらい経って、撮りたいものは撮れたので家に帰ることにした。家の中に入っても自分の周りの空気だけがむしむしとしているから、涼しそうなお母さんが少しだけ羨ましかった。このままだと暑くてどうにかなりそうなので、五月にもかかわらず扇風機をつけた。涼みながらスマホの写真アプリを開いて撮った写真を確認する。今日撮った写真は途方もない量で、一枚ずつ見ていくとなると、気が遠くなりそうだった。知らないうちに五十枚を優に越えるくらい撮っていた自分に驚いた。でも、撮った写真はあまりぼけたりぶれたりしておらず、どれも自分の中では満足できた。例えば、目で見たと通りの緑の青さ。被写体を照らす日光のまぶしさや、今にも画面から出てきそうな生き物たちの美しさ。撮影中は撮った写真を確認することはなかった。こんなに映りが良かったとは思っておらず、自分の撮ったもので初めてため息が出そうになった。帰り際におまけとして音を楽しもうと撮った水路の動画を再生してみると、そこに数匹のカメがゆっくり泳いでいるのが映り込んでいて驚いた。今日撮ったものたちこそ堂々と家族に見せられる。少し嬉しかった。

その日、何となくだけでもっと綺麗な写真を撮りたいと感じた。それと同時に、休日のにんびり外に出てみるのも悪くないのかもしれない、とやっと思えた。公園で運動をしたり、毎日出かけたり、とまではきつとすぐにはならないだろうけれど、たまに写真撮影に行くくらいなら良いのかもしれない。外に出ると気分転換はもちろん、家の中より新鮮な空気を吸うことができる。写真を撮るためにどこかに行ってみれば、まだ自分が見たことのない綺麗な景色に出会うことができるかもしれない。だから、休日にそういうものたちを求めて家の外に出てみて、外の楽しさを味わってみたい。そして、夏休みは、夏にしか撮れない景色を求めて少し遠い所へ行ってみたり、海や花火、入道雲などの「夏の象徴」をカメラに収めてみたりして、それを小さな思い出にしたい。そうやって外も良いかも、と思えたのは、外に出るのに抵抗を感じていた私の成長の中の一つだ